

令和 2 年 6 月 18 日現在

機関番号：32633

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2014～2019

課題番号：26463575

研究課題名（和文）動物との共生を基盤としたCommunity Developmentモデルの構築

研究課題名（英文）Development of a community-development model based on human-animal bond

研究代表者

小林 真朝（KOBAYASHI, Maasa）

聖路加国際大学・大学院看護学研究科・准教授

研究者番号：00439514

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,700,000円

研究成果の概要（和文）：概念分析にてHuman-animal Bondは「地域における人と動物双方の健康と福祉の基盤となる互恵的な共生関係である」と定義できた。先進的取組の自治体インタビューでは「動物との共生」の定義づけは明確ではないものの、住民、NPO、学校等と協働しながら様々な試みが行われており、現場で近年挙げられる問題は、保健分野との協働がなければ解決されない課題であることが見出された。住民への質問紙調査からは地域への認識や地域活動といった地域へのコミットメント、動物との共生への認識はペット飼育経験がある住民のほうが高かった。動物との共生を基盤とした地域づくりは、ペット飼育者を核に進められる可能性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

公衆衛生看護活動における「地域づくり」はソーシャルサポートの醸成と共に重要な課題となっている。近年は地域のつながり、ソーシャルネットワーク、多様性の受容が重要視されており、そうした社会背景の中で、地域における動物との共生による住民の結びつきは自治体にとっても重要な課題になっている。住民の動物との共生への認識は、ペットとの共生経験が関連していることが示され、また動物共生にまつわる現場の様々な課題は、公衆衛生看護的な関わりと切っても切り離せない住民の課題とつながっており、今後さらに部署横断的な住民へのアプローチが求められることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：Human-animal bond could be defined as “a mutually beneficial symbiotic relationship underlying health and welfare of both people and animals in the community”.

The interviews with the municipalities taking progressive approaches found a variety of attempts were being made in cooperation with local residents, non-profit organizations, and schools despite the absence of clear definition of “human-animal bond”. Recent problems identified in the field were found to be unsolvable without cooperation with the public health sector. The questionnaire survey of local residents found those who have had pets had a higher sense of identity with the community, were committed to the community by participating in the local activities, and were more aware of human-animal bond. Community development based on human-animal bond may be advanced by using pet owners as a core.

研究分野：公衆衛生看護学

キーワード：地域づくり 公衆衛生看護学 人と動物の関係 動物との共生 Human-animal Bond

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

2011年現在、全国のペット飼育率は37.9%であり、ペットの中で最も多い犬の飼育率は17.7%である<sup>1)</sup>。過去10年間に犬の飼育経験があるのは約3割であり、3割以上が今後犬を飼育したいと考えている。犬の飼育理由は、番犬とすることを目的とした飼育から、コミュニケーションの活性化、生活の充実、自身の癒し、健康増進、伴侶の獲得などを目的とする飼育に移行しており、人々にとっての動物の存在は「ペット」から「伴侶」へと関係性が変化している。さらにペットを「家族の一員から地域の一員へ」と謳っている自治体もみられ<sup>2)</sup>、地域における動物との共生は近年の自治体やコミュニティの1つの課題でもある。

人々と動物との関係や相互作用については学際的な研究が進んでおり、ペット飼育者が医療機関を受診する回数は有意に少ない<sup>3)4)</sup>、犬所有者が犬と散歩をすることでヘルスケアコスト削減になる<sup>5)</sup>などの報告があり、これらは逼迫する日本の医療保険・介護保険事情から鑑みて、公衆衛生領域において注目すべき研究課題の1つであるといえる。一方で看護における研究では、小児病棟や精神科病棟、高齢者施設における動物介在療法など、場や対象が限定されており、公衆衛生看護領域や地域住民を対象とした犬を始めとする伴侶動物に関する先行研究は少ない。動物との共生は健康を構成する社会的要因の1つであり、「動物と共に生きる」という選択は、新たな伴侶(家族)を得るというライフイベントの1つとして10-20年という長期を見据えて人生や生活、自身の健康を考えることにつながり、動物と暮らすことで得られる充実感や情緒的安定は、人々のQOLに大きな意味をもたらすといえる。さらには地域住民とのコミュニケーションの活性化や、既存の家庭・社会的役割に加え、動物という伴侶がいることで社会的存在としてあり続けるための新たな自己役割の創出が可能であるといえる。このことは特にわが国の50代以上の向老期や高年期を含む世代にとって、今後の生活や健康を左右する重要な要素となると考えられる。

さらに厚生労働省は、地域のソーシャル・キャピタルに立脚した活動を展開し、多様化・高度化する住民ニーズに即した取組みを推進するとともに、その「核」となる人材を発掘・育成すべきであるとしている<sup>6)</sup>。先行研究では犬所有者の50%が犬を通じて自身の近隣で人と知り合い、ペット所有者は非所有者よりも57%多く地域活動や社会活動といった市民活動を行っていた<sup>7)</sup>。研究者の先行研究(平成22-25年度科研費補助金「生活習慣特性を活用したコミュニティ支援プログラムの開発と評価」)においても、犬飼育者は地域参加の得点が全般的に高く、犬の飼育者同士の気遣い合いや連帯感、サポート、また地域への所属意識の高さが示されたことから、安定した住民層として、地域の交流の核の核として活躍できる可能性が示唆された。開発されて一定の期間が経過した新興住宅地や長く住んでいる住民が多い地域において、このような犬飼育者が活躍できる機会がより期待できる。例えば、地域における保健活動において、地域で動物と暮らす人々がもつ生活習慣特性を活用した相互の健康づくりや社会的交流の促進といった保健事業、地域の見守りなどといった地域活動への向老期世代の参加につながられる可能性があり、その実践方法の開発が必要とされる。

### 2. 研究の目的

本研究では、インタビュー調査や質問紙調査を通じて、動物との共生経験と他者との交流や地域参加といった社会的健康側面との関連についての分析により、「動物との共生」という経験が他者との交流の円滑化や活性化、さらには地域への所属意識や地域活動への参加に有意な関連があるのかどうかを検討する。また分析結果および先進的研究・実践の取組みについての検討結果から「動物との共生を基盤としたCommunity Developmentモデル」の構築を行い、ワークショップにおける検討や学会発表などを通じてモデル検証を行い、モデルの洗練を行う。

### 3. 研究の方法

動物との共生経験と他者との交流や地域参加といった社会的健康側面との関連についての分析を通して、「動物との共生を基盤としたCommunity Development」に向けたモデル構築と検証を行うために、以下の計画で段階的に研究を進めていく。

- (1) 「動物との共生」概念についての文献検討
- (2) 「動物との共生」に関する先進的研究・実践機関における専門的知識の収集  
「動物との共生を重視した地域づくり」に取組む自治体および活動実践者へのインタビュー
- (3) 「動物との共生と社会的交流・地域参加の関連」についての質問紙調査
- (4) 調査に基づくモデル構築およびワークショップの開催を通じた概念モデルの検証

### 4. 研究成果

#### (1) 「動物との共生」概念についての文献検討

動物との共生についてその定義についての記載がある文献や特性を述べている文献が少なく、概念分析には不十分であった。そのため、類義語として用いられることの多い「Human-animal Bond」について概念分析を行った。文献はPubmedにて検索用語に「Human-animal Bond」を用いて検索を行い、102文献について検討を行った。文献中で「Human-animal Bond」としての特性が述べられているのは19文献であった(表1)。このうち、他文献の定義を引用しているものが11文献あり、この他に「定義するのは難しい」としているものが1文献、human-animal bondの

具体的要素を挙げているものが1文献、「人の愛着理論」と共通する要素を挙げているものが1文献みられた。

表1. 「Human-animal Bond」の特性

特性	特性の和訳
The effects spring from a phenomenal, natural property in the relationship.	(他者との)関係の現象的で自然な特性
The unique relationship between people and pets	人とペットのユニークな関係
An attachment that can be interpreted as an affectionate, friendly, and companionable interaction between a human being and an animal	愛情がこもり、友好的で、打ち解けた人と動物との関わり合いと解釈できる愛着
Mutual, affective, emotional attachment between two individuals that is relatively long-lasting and survives temporary separations	比較的長期間継続し、一時的な別離を乗り越えるような、2者の間の相互的、情動的、感情的な愛着
The acknowledgement of the importance of the attachment between companion animals and their owners	コンパニオンアニマルと飼い主の愛着関係の重要性の認知
The affection someone has for his/her companion animal	人がコンパニオンアニマルに対して抱く愛情
Profound privilege that most veterinarians and many animal owners derive from living with animals	ほとんどの獣医と飼い主が、動物との生活から得る深い恩恵
A mutually beneficial relationship between people and animals shaped by behavior essential to the health and well-being of both	人と動物双方の健康と福祉に重要となる行動によって形成される、相互に有益な関係
A dynamic relationship between people and their pets that may have positive and negative elements	ポジティブな要素もネガティブな要素も含む、人とペットのダイナミックな関係
The affection an owner has for his or her animals and the care that owner provides for those animals	飼い主の動物に対する愛情と、動物に対して行うケアを象徴するもの
Important connection between people and their pets	人とペットの重要な結びつき
A partnership between people and animals	人と動物のパートナーシップ
A truly symbiotic relationship whereby each party derives a meaningful benefit from the other	お互いに意味のある利益を得られるような共生関係
A foundation of the practice of One Health in the community	地域におけるOne Healthの基盤のひとつ
It is based on dependency and is specific in its focus, endures over time and results in one individual seeking and maintaining proximity to another individual	依存をベースとし、具体的なフォーカスがあり、長期間継続し、一方が他方の近くにしようとする/いるような、特別で情動的な関係
A symbiotic relationship	共生関係
Another term for this emotionally positive relationship (attachment to pet, 前述) is the human-companion animal bond	感情的にポジティブな関係(ペットへの愛着と同義)
a mutually beneficial and dynamic relationship between people and other animals that is influenced by behaviors that are essential to the health and well-being of both	人と動物双方の健康と福祉にとって重要な心理的、生理学的状態に影響を与える、相互に有益でダイナミックな関係(AVMAの定義)
Attachments between people and companion animals are normally symbiotic, and the term human-companion animal bond (HCAB) describes these interspecies relationships.	共生的な愛着を伴う異種間の関係
The positive effect of health and well-being resulting from the interactions with a pet	ペットとの相互作用によってもたらされる健康と福祉のポジティブな影響

また、Human-animal Bond の関連概念として、human-animal relationship, Human-animal interaction 等、様々な用語(105語)が用いられていた(表2)。関連概念では「結びつき、相互作用、関係」といった概念で構成されていた。

表2. 「Human-animal Bond」の関連概念

関連概念	関連概念和訳	文献数
Human-animal relationship(s)	人と動物の関係	9文献
Human-animal interaction	人間と動物の相互作用	5文献
Relationship between people and animals	人間と動物の関係	4文献
Pet attachment	ペットへの愛着	3文献
Animal companionship	動物との親交	3文献
Companionship	コンパニオンシップ	2文献
Human/companion animal interaction	人間とコンパニオンアニマルの相互作用	2文献
Attachment and bonding	愛着と結びつき	2文献
Emotional bonds	感情的な結びつき	2文献
Attachment bonds	愛着による結びつき	2文献
Companion animal bonding (CAB)	コンパニオンアニマルとの結びつき	2文献
他94語		各1文献
関連概念数	105語	

概念分析の結果、Human-animal Bond は「地域における人と動物双方の健康と福祉の基盤となる互恵的な共生関係である」と定義づけられた。

(2)「動物との共生を重視した地域づくり」に取り組む自治体および活動実践者へのインタビュー  
 全国の自治体ホームページを検索し、先進的な取り組みをしている自治体を抽出し、5自治体に属する8名の担当者に対し、自治体における「動物との共生」施策やその概念、動物との共生推進活動についてインタビューを行った。

「動物との共生」についての定義づけは明確ではないものの、住民、NPO、議会、学校等と協働しながら、様々な試みが行われており、高齢者の飼育問題、多頭飼育崩壊への対応など、近年の課題として挙げられる問題は、保健分野との協働がなければ解決されない課題であることが見出された。

(3)「動物との共生と社会的交流・地域参加の関連」についての質問紙調査

関東地方に住む20-70代男女700名に対し質問紙を郵送し、501名から回答を得た(回収率71.6%)。地域住民のとらえる動物との共生や地域参加について分析を行った。

ペット飼育と属性の関係について、ロジスティック回帰分析を行ったところ、有意確率が0.05以下の変数は、性別、同居者の有無、住居形態(戸建・集合)の3つの変数であった(表3)。これらの変数がペット飼育に関連がある可能性が高い。特に同居者がいるかないかのオッズ比が2.308と高く、同居者がいる人の方がペット飼育は2.3倍になると考えられる。

表3. ペット飼育の属性によるロジスティック回帰分析

	偏回帰係数	標準誤差	有意確率	オッズ比	オッズ比の95%信頼区間	
					下限	上限
性別	.532	.223	.017	1.702	1.1	2.633
年代	.101	.075	.177	1.107	.955	1.282
同居者の有無	.836	.334	.012	2.308	1.199	4.444
住居形態(戸建・集合)	.513	.226	.023	1.671	1.072	2.604
就労有無	-.055	.258	.833	.947	.571	1.571
定数	-2.199	.705	.002	.111		
モデル $\chi^2$ 検定	p<.001					
判別の中率	66.1%					

地域参加の認識については、研究者が作成した8項目4段階リッカート尺度による質問項目を用いた。地域活動については同様に6項目4段階リッカート尺度による質問項目を用いた。

地域参加の認識ならびに地域活動について、ペット飼育経験の有無と各項目を比較した結果、14項目ともペット飼育経験がある住民のほうが重要ととらえる割合や参加の割合が高かった。

さらに地域参加・地域活動について探索的因子分析を行い(表4・5)、地域参加の認識は「地域への所属意識」「地域への貢献意識」の2因子、地域活動は「地域内活動への参加」「地域づくり活動への参加」の2因子となった。

表4. 地域参加の認識の因子分析

	N=501	
	Factor 1	Factor 2
Factor 1. 地域への所属意識 (Cronbach's alpha=0.83)		
自分が「地域の人間」だという感覚がある	<b>0.93</b>	-0.08
地域を歩いているとき、自分はこの地域に属していると強く感じる	<b>0.83</b>	-0.07
地域の人々と挨拶をする機会が多い	<b>0.67</b>	0.03
地域は大切だと思う	<b>0.55</b>	0.13
Factor 2. 地域への貢献意識 (Cronbach's alpha=0.79)		
地域を良くするための活動は熱心な人たちに任せておけばよい	-0.07	<b>0.92</b>
地域での環境づくりは行政に任せておけばよい	-0.04	<b>0.78</b>
地域を良くするためにみんなと一緒に活動しようという気持ちがある	0.35	<b>0.49</b>

太字は因子負荷量が0.4以上の項目

表5. 地域活動の因子分析

	N=501	
	Factor 1	Factor 2
Factor 1. 地域内活動への参加 (Cronbach's alpha=0.83)		
自治会や町内会に参加している	<b>0.86</b>	-0.04
地域住民と日常的な付き合いをしている	<b>0.74</b>	0.08
地域行事に参加している	<b>0.60</b>	0.20
Factor 2. 地域づくり活動への参加 (Cronbach's alpha=0.84)		
よりよい地域づくりのための活動をしている	0.01	<b>0.92</b>
地域でボランティア活動をしている	0.06	<b>0.74</b>

太字は因子負荷量が0.4以上の項目

地域参加の認識と地域活動について、下位尺度ごとに一般線形モデルによる多変量解析を行った。現在のペット飼育および過去のペット飼育についての変数を投入したが、有意差はみられなかった。属性について分析したところ、同居者の有無の主効果(F(1,501)=7.532, p<.001)と住居形態の主効果(F(1,501)=14.394, p<.001)に有意差が見られた(表6)。

表6. 地域参加活動(第1因子【地域内活動への参加】)と属性の関連(一般線形モデルによる多変量解析)

	N=501				
	平方和	自由度	平均平方	F値	有意確率
年代	22.002	5	4.400	7.532	<b>0.000</b>
同居者の有無	0.869	1	0.869	1.487	0.223
住居形態	8.410	1	8.410	14.394	<b>0.000</b>
就業有無	0.437	1	0.437	0.749	0.387
年代*同居者の有無	1.990	5	0.398	0.681	0.638
年代*住居形態	3.987	5	0.797	1.365	0.236
年代*就業有無	3.574	5	0.715	1.224	0.297
同居者の有無*住居形態	0.053	1	0.053	0.091	0.763
同居者の有無*就業有無	0.527	1	0.527	0.903	0.343
住居形態*就業有無	0.570	1	0.570	0.976	0.324

「動物との共生の重要性」認識と属性の関係について、ロジスティック回帰分析を行ったところ、有意確率が0.05以下の変数は、性別と現在のペット飼育の2つであった(表7)。これらの変数が動物との共生を重要と考えることに関連がある可能性が高い。性別では女性のほうが重要と考えており、ペット飼育者の方が重要と考える人が多いと言える。

表7. 「動物との共生」の重要視と属性ロジスティック回帰分析

	偏回帰係数	標準誤差	有意確率	オッズ比	オッズ比の95%信頼区間	
					下限	上限
同居者有無	.032	.329	.922	1.033	.542	1.967
住居形態(戸建・集合)	-.036	.251	.884	.964	.590	1.576
就労有無	-.176	.249	.480	.838	.514	1.367
性別	-.547	.245	.025	.579	.358	.935
現在のペット飼育有無	-.585	.271	.031	.557	.328	.947
定数	3.177	.838	.000	23.984		
モデル $\chi^2$ 検定	p<.05					
判別の中率	75.2%					

住民への質問紙調査からは地域への認識や地域活動といった地域へのコミットメントはペット飼育経験がある住民のほうが高く、動物との共生への認識は当然ながらペット飼育者が有意に高かった。

また質問紙の自由記載では、動物との共生とは「人と接することと同じように動物の“生”を尊重して共に生きていくこと」「win winの関係になること」「人間と動物と環境が、相互関係性を持ち、お互いが良い方向へ向かうためのもの」「動物との共生とは命を尊ぶ考え方そのもの」「多様性の維持」などと捉えられており、「動物の共生は人との共生にも繋がる」「物言えぬ動物とのふれ合いは心をおしはかるという意味でも大切」「生きていく為の根源を幼少時から考える機会をもち、生活の一部として意識できるようにすることが重要である」などが語られた。

動物との共生を基盤とした地域づくりは、ペット飼育者を核に進められる可能性が示唆された。

#### (4) 調査結果を踏まえたワークショップの開催

2019年11月17日にペットとの共生推進シンポジウムにてこれまでの研究成果を発表した。2020年10月開催の日本公衆衛生学会総会公募シンポジウムに採択され、成果を発表予定である。

#### <引用文献>

- 1) ペットフード協会 (2012). 第19回犬猫飼育率全国調査.  
<http://www.petfood.or.jp/data/chart2012/index.html>.
- 2) 東京都福祉保健局 (2007). 東京都動物愛護管理推進計画(概要).
- 3) Motooka, M., Koike H., Yokoyama, T., et al. (2006). Effect of dog-walking on autonomic nervous activity in senior citizens. The medical journal of Australia, 184(2), 60-63.
- 4) Jorm, A. F., Jacomb, P. A., Christensen, H., et al. (1997). Impact of pet ownership on elderly Australians' use of medical services: an analysis using Medicare data. The medical journal of Australia. 166: 376-377.
- 5) Bauman, A. E., Russell, S. J., Furber, S. F., et al. (2001). The epidemiology of dog walking: an unmet need for human and canine health. Med J Aust, Dec 3-17; 175(11-12), 632-634.
- 6) 厚生労働省 (2012). 地域保健対策検討会報告書～今後の地域保健対策のあり方について～.  
<http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000002c3vx-att/2r9852000002c432.pdf>  
(2013.08.14)
- 7) Wood, L., Giles-Corti, B., Bulsara, M. (2005). The pet connection: Pets as a conduit for social capital?. Social Science & Medicine, 61, 1159-1173.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 小林真朝
2. 発表標題 ペットが高齢者の健康維持に果たす役割
3. 学会等名 第8回ペットとの共生推進シンポジウム（招待講演）（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小林真朝、星旦二、谷口優、山本和弘
2. 発表標題 ペットと人の健康におけるエビデンス構築の展望
3. 学会等名 第79回日本公衆衛生学会総会 公募シンポジウム
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----